

親鸞仏教センター通信

2005.
September

2005年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第15号

場 の 力

親鸞仏教センター研究員 高 海 史

言えそうで、うまくその意味を言語化できない言葉がある。それが私たちにとって大切なことを言い表そうとする言葉であればあるほど、相手に説明するのに窮してしまい、途方にくれてしまう。例えば、「いのち」の実感。科学が説得力をもつ現代にあって、人間の「いのち」を科学的に細胞や分子の微細なところまで説明できても、いのちの実感を伝えることは大変困難なことであろう。だからといって、「いのち」が無いのではない。では、相手にどう伝えたいいのだろうか……。

これと同様、言葉にのせることは難しいけれど、大切な意味をもつ言葉がある。そのひとつに「場の力」がある。

帯津良一先生(帯津三敬病院名誉院長)は、親鸞仏教センターの活動に関心をもたれている方であるが、医療の現場から「場には力があり、それが弱まっているときには、患者さんたちの身体の状態がすぐれない」とおっしゃっている。この言葉は、長年ガンの研究、治療に携わり、たくさんの事例を目の当たりにされた経験に裏打ちされたものである。だから説得力がある。

また、作家の田口ランディ氏は、本年4月の東本願寺真宗会館(練馬区)での講演の折、北海道浦河^{うらかわ}の「べてるの家」について言及された。ほかの病院では手に負えないような、日常生活に支障をきたしかねない方々が、「べてるの家」に暮らすようになると精神的に落ち着いてくる。特殊な治療法があるわけでもない。けれども、そこに「場の力」がはたらいていて、それが治療の代替作用になっているのではないかと話された。さらには、「場の力」は作り出そうとしても作ることはできず、「他力」に通じるものがあることを指摘された。

あらためて「場の力」、それを成り立たせる「場」ということに関心をもって言論界を眺めてみれば、そうしたことに注目したり、研究している方が存外多くいることに気づかされる。それだけ大切な概念であり、いま、一人ひとりが本当に見直すべきことなのではないだろうか。「場の力」は、私たちの生活に潤^{うるわ}いをもたらし、それをいただかなければ、人の生は枯れてしまう。極めて日常生活に即していて、それでいて人間のはからいを超えたはたらきを言わんとしている。「真宗、仏教の言葉が生活から遊離しがちである」としばしば指摘されるが、どうすれば、それらが私たちの生活感覚に響いてくるようになるのか。その手がかりとして、「場の力」はどうだろう。学ぶ点の多い、極めて有益な概念なのではないか、と最近感じている。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 苦悩の衆生に名を讃められよう —大乗の悲願—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第37回と第38回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第37回では『浄土論』の「主功德」について、第38回では「不虛作住持功德」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第37回からその一部を紹介する。

(越部良一)

■ 衆生が讃めるところに阿弥陀はまします

『浄土論』で「莊嚴主功德成就」という言葉は、二度出てきます。一つは、環境世界の如くに浄土を莊嚴する「器世間清浄」のなかに出てまいりましたが、今度は、「衆生世間清浄」、あたかも人間関係の如くに浄土を莊嚴するその一つに、また主功德ということが言われてくる。環境世界に立ち上がった主体、環境世界に立ち上がっている如來自身を主功德として語るわけです。「天人丈夫衆 恭敬遶瞻仰」（『真宗聖典』137頁 東本願寺出版部）と。

天、人という言葉で、浄土の衆生を表し、丈夫とは強い人という意味ですが、強いというのは、体力とか意志力とかではなく、菩提心を表すわけです。自らが覺りを開くと共に、一切衆生をたすけたいという、そういう願いを成就することは、いわゆる有限な力では不可能である。にもかかわらず、その志願に立ち上がって、それを成就しようとする。そういう菩提心をもった丈夫衆が恭敬する。そして、まわりをめぐりながら、瞻仰する。拝み崇める。阿弥陀如來がおられるそのまわりを、無数の衆生が尊敬して、拝みながらまわる、そういうイメー

ジです。

阿弥陀如來は何であるかというときに、阿弥陀如來自身はこういうものと言わずに、浄土の衆生がそのまわりをまわって尊敬するのだと、こういうふう荘嚴する。

これは何を象徴しているのか。本願で言いますと、私はこれは十七願（同18頁）だと思うのです。十七願は、「諸仏称揚の願」とか、「諸仏称名の願」とかと名づけられておりますけれども、阿弥陀は、諸仏に自分の名を称えてほしい。つまり、名を与えたい。それに応えて、諸仏が阿弥陀の名を称えてくださると、その時に、自分は、阿弥陀仏になりましょうと。阿弥陀というものが、どこかにあってというのではなく、無数の諸仏がおられるところで、その無数の諸仏が讃めるところに、阿弥陀が阿弥陀仏として成就していく。

阿弥陀ひとりがいて、そのまわりをたくさん存在が、みな瞻仰して歩くというと、この世的にイメージすれば、あたかも一人の独裁者がいて、そのまわりをみんなが這いつくばって付いていくという、そういうイメージになるわけですが、そうではない。この世的に表現すると、そういう表現しか取れないかもしれないけれども、そうではなくて、むしろ一切衆生の苦悩の根本に沈みたいわけです。一切苦悩の衆生をたすけるためには、一切苦悩の衆生に自分の名を称えてほしい。称えようと思ったところのところに、自分が立ち上がるのだと。そういう方法で、大乗の悲願を兆載永劫の未来にわたって成就していきたい。こういう願いが、阿弥陀の本願だろうと思うのです。だから、独裁国家をつくって一切の衆生に自分の言うことを

聞かせるというイメージになると、これは何の意味もない。そういうことが浄土なのではなくて、浄土は、よく見ると阿弥陀自身は、言わばいないわけです。阿弥陀自身を語ろうとすると、まわりをグルグルと衆生が尊敬してまわっている、その真ん中にいそうだけれども、真ん中のことは語っていないわけです。これは次の「不^ふ虚^こ作^さ住^{じゆう}持^じ功德」でも、「仏の本願力を観ずるに」(同137頁)と言って、阿弥陀を観るとは言っていない。もちろん、阿弥陀は本願力なのですけれど、願がはたらいているということをもって、阿弥陀とするわけです。

天人丈夫衆も自分を立てる必要はないわけです。阿弥陀を讃めていればよい。阿弥陀も自分で立つのではない。天人丈夫衆が讃めるところに、阿弥陀がましますわけです。何か、そういう不思議な信頼といいますか、自分が立たなければどうにもならないといった我執から起こる信頼ではなくて、存在の真理に触れて存在を信頼するということから出てくるような、無理のない呼びかけなのではないかと思うのです。

■ 浄土とわれわれの生活の響きあい

現生正定聚と、この主功德とは、別ではない。どうも親鸞聖人の言葉を読んでおきますと、彼の土の衆生と、この穢土の衆生とは因果で関係している。ということは、別ではない。しかし位は違う。その違いにおいて、有限であるという自覚をもつ。罪が深い。「悲しきかな、愚禿鸞」(同251頁)と。でも、本願に触れた言葉としての「悲しきかな、愚禿鸞」は、明るいのです。一人でもがいているのではないのです。悲しいのは事実だけれど、そこに如来の本願に照らされている明るみがある。だから、悲しいままに歩んでいける。絶望して止まってしまうのではなくて、無限に大悲をいただいて、悲しい生命を飲んで生きていける。

こういう道が、この天人丈夫衆と響きあっている。われわれが本願の大悲を讃仰する、讃めたたえていくという生活と、浄土の衆生が天人丈夫衆として阿弥陀を恭敬している姿とが、響きあっている。実体的に一つだとか、同じだと

か、もうここが浄土だとか、そういうことを言う必要はない。限りなく遠く、終わりが無い。まったく異質で遠いだけれど、本願のはたらきをいただければ、響きあっている。そこに安心して、われらはわれらの分限を歩んでいける。遠い存在を、遠く離れていて手が届かないと歎く必要がない。本願他力を念ずるときには別ではないという、不思議なはたらきがここに来る。

■ 隣に親鸞が居る

親鸞の伝説で、一人居ると思うなら隣に親鸞が居る、二人居るなら三人居ると思えと、そういう言葉が伝えられています。自分はどこに居るかといったら、念仏する人の隣に居るよと親鸞が言ったと(「一人居て喜ばは二人と思うべし、二人居て喜ばは三人と思うべし、その一人は親鸞なり」「御臨末の御書」)。そういうふう^なに信じられて伝えられてきている。本願を生き^た親鸞は、親鸞という名が付けられた肉体はなくなっ^たけれども、親鸞の願いとして立てられた親鸞の名は、それを信ずる人が^{りくぞく}陸続と続いていく限り、生きているわけです。その願と共に生きてはたらくわけでしょう。そこに阿弥陀があるわけでしょう。だから、この主功德の語り方というものは、私は面白いなと、また有り難いものだと思うわけなのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講(無料)いただけます。なお、11月29日は、國府田隆夫氏(東京大学名誉教授)、斎藤勝治氏(放送衛星システム顧問)をお招きし、「科学・哲学、そして宗教の間の対話を求めて—科学者は現代の状況に免責か?—」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2005年 9月 休講します
10月21日(金)午後6時30分～9時
11月29日(火)午後5時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

— 現代と親鸞の研究会・第16回 —

アイデンティティとスピリチュアリティ

— 近現代における探究と現代社会における意味 —

東京大学大学院助教授 西 平 直



西平 直氏

2004年12月3日、東京ガーデンパレス（文京区）において、東京大学大学院教育学研究科助教授の西平直氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。現代における自己探究のあり方を追及されている西平氏に、自己探究の重要な要素であるアイデンティティとスピリチュアリティの関係について語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ アイデンティティと

スピリチュアリティの根本問題

アイデンティティという言葉は、トランスパーソナル理論で言えばパーソナルに相当し、ユングで言えば自我に対応します。

この、アイデンティティ＝パーソナル＝自我を強調するとは、ひと言で言えば、「自分を大切にしよう」というメッセージです。その自分というのは、主体性という言葉で語られたりする対人関係のなかの自律的主体、社会のなかの自立的個人、振り回されない、流されない主体性の確立です。しかし、それは裏を返せば、支配し、操作し、利用する主体になります。アイデンティティは「我」という言葉に相当する。ということは執着^{しゅうじやく}、特に、我執^{がしゅう}にとらわれていくということです。

それに対して、スピリチュアリティ＝トランスパーソナル＝個性化というのは、メッセージとしては、「自分にこだわるな」ということです。あまり自分にとらわれない、縛られない、

ないしは、より広いアイデンティティへ向かうという文脈になります。離れる、溶ける、消す、しがみ付かない、身を引き剥がす、という方向です。これらを「自己否定性」と、ゆるやかに特徴づけます。

こうした枠組みのなかで何を問題にするのかというと、一つはアイデンティティの問題。アイデンティティは必要だが、アイデンティティは執着になってしまうという点です。そして偏見になり、独断的、閉鎖的、排他的になり、敵をつくっていくのです。だとしたら、アイデンティティをゆるやかに保ちながら、それにとらわれず、異質なアイデンティティと対話し、共存する寛容なアイデンティティは可能か、ということが一つの問題になります。

もう一つは、逆にスピリチュアリティの問題。それは内面への沈潜であり、個人で探究することとして、とても大切だと思います。ところが、それはあらゆる乱用に対して無防備です。現実離れであったり、社会的批判意識を欠いたり、センチメンタルな自己満足に堕したり、あるいは全体主義と補完的になったりします。そうした危険からいかに身を守ることが可能か。そのためにどういうポイントに気をつければいいのか。この二つの難問が今日の課題です。

■ アイデンティティと

スピリチュアリティとの兼ね合い

スピリチュアリティは、内面の出来事ですが、他者や社会から離れた個人の内面に閉じこもるのではなく、一度社会から離れた後に、あ

らためて関わり直すようなあり方を考えたいのです。アイデンティティの問題から離れた「純粋なスピリチュアリティ」は、理念に過ぎないのだろうとも思います。

そうすると、アイデンティティを求めつつ、しかし、とらわれない、縛られないことを理念とした「無自性のアイデンティティ」を考えたいわけです。

この問題を、精神分析家のエリクソンは「超越的アイデンティティ」として捉えるのです。それは決して地上では実現されない。そういう人類共同のアイデンティティを「超越的アイデンティティ」と呼んで、これを絶対的な否定性と考えます。つまり、「地上のあらゆるアイデンティティ」に対して、身の^{ほど}程を知らせるのです。例えば、「わが宗教こそ、すべての宗教を包括している」という言い方が、一番危険です。そういうアイデンティティは、決して地上では実現できません。すべてを包括するアイデンティティを理念としては置くけれども、これは絶対否定するだけであって、実現されないのです。そういう意味で、「超越的アイデンティティ」という言葉を使っています。

さらに、エリクソンは、トータリティー (totality) としてのアイデンティティと、ホールネス (wholeness) としてのアイデンティティを区別します。どちらも全体性という意味は同じですが、トータリティーというのは、いわば固定的、閉鎖的、排他的です。それに対して、ホールネスというのは、包括的、柔軟、多様、未完で動き続けていくアイデンティティと言うのです。「無自性のアイデンティティ」は、「ホールネスとしてのアイデンティティ」ということになります。

トータリティーにならないような工夫を仕込んだアイデンティティ、つまり、何らかの自己否定を内に含んだアイデンティティ形成です。

ここでアイデンティティとスピリチュアリティの兼ね合いを整理してみたいと思います。

スピリチュアリティということを、アイデンティティに内在する自己否定性として理解した

い。そういうスピリチュアリティがあつてはじめて、「ホールネスとしてのアイデンティティ」が可能になるということです。それに対して、スピリチュアリティがないときには、「トータリティーとしてのアイデンティティ」となっていってしまいます。そういう関係でとらえたいと思います。

他方で、今度はアイデンティティをスピリチュアリティに内在する自己肯定性として理解したい。つまり、スピリチュアリティが自己否定性、解き放っていく方向であるとすれば、アイデンティティは自己肯定です。アイデンティティがあつてはじめて「現実社会におけるスピリチュアリティ」が可能になります。ないしはアイデンティティがないと、無防備、無節操となって、何でもありになってしまいます。そういう兼ね合いとして考えていきたいと思っています。

(文責：親鸞仏教センター)

※西平直氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第9号(2005年12月1日号)に掲載予定です。

西平 直(にしひら ただし) 東京大学大学院教育学研究科助教授

1957年、山梨県生まれ。信州大学人文学部卒業。東京都立大学大学院(哲学専攻)修士課程修了。東京大学大学院(教育学専攻)博士課程修了。教育学博士。専攻は教育人間学。著書に『エリクソンの人間学』『魂のライフサイクル』『宗教心理の探究』(以上、東京大学出版会)、『魂のアイデンティティ』(金子書房)、『シュタイナー入門』(講談社現代新書)、近著に『教育人間学のために』(東京大学出版会)など多数。



「現代と親鸞の研究会」(文京区の「東京ガーデンパレス」で)

らいぬべけれ。かくもうせばとて、かならずひとにそしられんとはあらず。仏の、かねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがいをあらせじと、ときおかせたまうことをもうすなり」とこそそうらいしか。

いまの世には学文^{がくもん}して、ひとのそしりをやめ、ひとえに論義問答むねとせんとかまえられそうろうにや。

学問せば、いよいよ如来^{にょらい}の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知^{ぞんじ}して、いやしからん身にて往生はいかが、なんどとあやぶまんひとにも、本願には善悪^{じょうあく}淨穢^{じようさい}なきおもむきをも、とききかせられそうらわばこそ、学生^{がくしやう}のかいにてこそそうらわめ。

たまたま、なにごろもなく、本願に相応して念仏するひとをも、学文^{がくもん}してこそなんどといのおどさるること、法の魔障^{ましよう}なり、仏の怨敵^{おんてき}なり。

みずから他力の信心かくるのみならず、あやまつて、他をまよわさんとす。つつしんでおそるべし、先師の御ところにそむくことを。かねてあわれむべし、弥陀^{みだ}の本願にあらざることをと云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

うことではない。仏陀が、信ずるものもあれば謗るものもあるに違いないと、かねてから見通されて、人々の疑いが決して起こらないようにと願われて説かれたことをいうのである」と言われている。

ところが、このころでは、学問をすることによってひとの口を塞ぎ、もっぱら論争や問答こそが大事なのだと身構えておられるのであろうか。

学問をするならば、ますます阿弥陀如来の本當のおころを知り、また、如来の悲願の広大さをも了解して、「自分のように浅ましく、愚かなものは往生できるだろうか」と不安になっているひとにも、阿弥陀如来の本願は、善・悪・浄・穢という人間の価値基準をまったく問題にしないのだということを、腑に落ちるように説明することができれば、それこそが本願を学ぶ者の本當の意義ではないであらうか。

たまたまのご縁で、無心に、阿弥陀如来の本願にかなって念仏に生きているひとに向かつて、「学問をしてこそ、往生は決定するのだ」と言つて脅かすことは、まさに仏法を妨げる魔ものであり、仏陀に對する怨敵である。

それは、自分自身に他力の信心が欠けているばかりでなく、他人をも迷わせてしまうことである。それこそ、謹んでおそれるべきである。先師・親鸞聖人のおこころに背いていることを、また、かさねて悲しむべきである。弥陀の本願ではないことを。

(訳…親鸞仏教センター)

私の「冊」

(羽塚高照)

『世界が変わる現代物理学』

竹内 薫(ちくま新書)

私がこの本を読むきっかけとなったのは、ある雑誌で、「仏教の縁起説は……実は現代物理学が実証しつつある宇宙像に極めて似ています」として紹介されていたことによります(宮崎哲弥「考える人」新潮社、二〇〇五年冬号)。

この本のテーマをひと言で言えば、著者自身が繰り返し述べているように、「モノからコトへ」ということになります。物理学は「コト的な世界観」へと変容している、と著者は説きます。「コト的な世界観」とは、物質、時間、空間などを固定化せず、あらゆるものを関係性へと帰着させる見方のことです。著者は、相対性理論や量子論などを、文系の読者にもわかりやすく解説し、またピカソの絵と相対性理論との関係性なども論じつつ、物理学から「物」という概念、および時間・空間といった概念までもが次々に消えてゆく過程を示していきます。

著者が示そうとする物理学の最先端の世界観は、彼は仏教の縁起説などにはまったく言及しませんが、確かに仏教的なモノの見方と通じるものがあります。やつと科学思想も仏教に追いついてきたな、などとい感じてしまうのは、やはり私が仏教びいきだからでしょうか。



『聖典』の試訳（現代語化）

『歎異抄』は、しばしば自己を卑下したような表現をとる。例えば、「われらがごとく下根の凡夫、一文不通のもの」が、それである。試訳では「私たちのような、自らの力では仏に成れない、愚かな、そして文字ひとつの意味も領解できないもの」とした（前号・第14号）。ただ、この表現は誤解を受けやすい。人間が相対的な価値観をもとにして、卑下や謙遜をしているように読めるからである。

しかし、『歎異抄』は、人間が自らのところを反省して、「愚か」と言っているわけではない。もし人間が自己自身を対象化して、「愚か」と表現するのであれば、仏は不要となる。仏の真実が基準ではなく、人間の相対的な価値観を基準とすれば、もはや仏教ではない。そこで、『歎異抄』は自己のころを基準にし、仏をないがしろにしている罪を教えるために、「下根の凡夫」と表現するのである。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十二条〉その3

原文

故聖人のおおせには、「この法をば信ずる衆生もあり、そして衆生もあるべしと、仏ときおかせたまいたることなれば、われはすでに信じたてまつる。またひとありてそして、仏説まことなりけりとしられそうろう。しかれば往生はいよいよ一定とおもいたまうべきなり。

あやまって、そしてひとのそうらわざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしてひとのなきやらんとも、おぼえそう

現代語訳

いまは亡き親鸞聖人のお言葉には、「この教えを信ずるひともあるし、また誘（さそ）うひともあるだろう」と仏陀が説いておられる。私はすでに信じているし、他のひとが誘（さそ）うこともある。それだからこそ仏説は真実だと身に受け止められる。これによって、本願の救いはますます必然的だと思われるのである。

もし、教えを誘（さそ）うひとがいなかったら、どうして信ずるひとがいるのに、誘（さそ）うひとがいなのだろうかといぶかしく思えてしまうだろう。このように言うからといって、必ずしもひとに非難されようとい

親鸞仏教センターの動き

（2005・6・8）

■2005年

- 6・1 情報誌『聖典』第9号、研究誌「現代と親鸞」第8号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第14号を発行。
- 6・3 第148回研究会議
- 6・10 親鸞聖人ご命日のつどい
- 6・17 第34回清沢満之研究会「近代親鸞教学の系譜」新潟大学副学長・深澤助雄氏
- 6・20 第65回英訳「教行信証」研究会
- 6・28 第38回「親鸞思想の解明」連続講座 藤原正寿氏（元研究員）に真宗大谷派講師が授与される。論題「出遇いに開かれる仏道」。
- 7・1 人事発令（東京大学名誉教授の前田専學氏が客員研究員に、新たに天野真知子嘱託、中津功非常勤嘱託が発令）
- 7・8 第39回「親鸞思想の解明」連続講座 親鸞聖人ご命日のつどい。第1回英訳「教行信証」グロッサリ研究会
- 7・10 学会発表（伊東惠深研究員「近代教学の課題」・真宗教学学会・大谷大学）
- 7・30 学会発表（伊東惠深研究員「化身土巻」における信仰批判の課題」・日本印度学仏教学会・四天王寺国際仏教大学）
- 8・1 人事発令（藤井朋行主事が大谷祖廟事務所主事に、和田恵利子書記が研修部書記に。武田定光、本多雅人、越部良一、常塚聡が、嘱託研究員に再任。新たに、山田孝文主事、百々海真嘱託研究員、春近敬嘱託研究員が発令）
- 8・12 第1回英訳「教行信証」再版編集会議
- 8・18 第40回「親鸞思想の解明」連続講座
- 8・19 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8・22 第24回現代と親鸞の研究会「国家と宗教」社会学者・橋爪大三郎氏
- 9・1 『親鸞仏教センター通信』第15号を発行。

● 英訳『教行信証』研究会報告 ③ ●

はたらきかける仏 応える衆生



大谷大学非常勤講師 櫻井智浩

英訳『教行信証』研究会は、月2回の輪読会を行い、前回報告（本紙第13号）以来、「行巻」の読解を進めている。

今号では、「行巻」の経文結帙まで（『真宗聖典』〈以下、『聖典』と略記〉156～161頁・鈴木大拙師英訳『教行信証』〈以下、『英訳』と略記〉15～20頁）の読解のなかから、研究会の成果の一端を第3回の報告とする。また、2005年2月3日開催の、「大悲の解釈学——鈴木大拙師『教行信証』私見——」と題する大谷大学教授・安富信哉先生の講義については、研究誌『現代と親鸞』第10号（2006年6月1日号）において掲載する予定である。



■ 英訳『教行信証』読解をふりかえって

これまでの英訳『教行信証』読解を通じて、仏の出世本懷の意味、本願、二種回向といった課題を、われわれ自身がもう一度捉え直す視座を、大拙師の訳文から学んできた。その後、2005年3月までに、「行巻」『悲華經』引文までの読解内容を総括し、龍樹『十住毘婆沙論』の四品九文（『聖典』161～167頁、『英訳』20～27頁）の英訳の読解を進めた。ここは、名号が「大行」であることを明かす箇所である。その「大行」を The great living 〈大いなる生〉（〈はたらき〉は、英訳『教行信証』研究会による試訳。以下、同様）と訳すことに代表されるように、英訳では『教行信証』の言葉が動的に表現されていることが多い。また、これまでの研究会報告において指摘したように、釈尊、阿弥陀仏、諸仏、衆生の関係が、つながりをもって表



安富信哉氏を迎えての研究会

現されている。そういった大拙師の英訳表現からは、言葉が生み出された背後にある生きたはたらきを、英語を通じて、まざまざと再現されるような印象を受ける。今回も、そのような一例を紹介したい。

■ 『悲華經』の引文

大行釈の経引文の最後には、『悲華經』^{だいせ}「大施品」^{だいせ}（『大正新脩大藏經』所収本では「授記品」）の「願わくは、我、阿耨多羅三藐三菩提を成り已らんに、無量無辺阿僧祇の余仏の世界の所有の衆生、我が名を聞かん者、もろもろの善本を修して我が界に生まれんと欲わん。願わくはそれ捨命の後、必定して生を得しめん。ただ、五逆と、聖人を誹謗せんと、正法を壊せんとを除かん」（『聖典』161頁・『英訳』20頁）という文が引かれる。一見して、『大無量寿經』十八願文の内容との関連がうかがえる箇所である。

大拙師は、次のように英訳している。

I pray: "When I finish attaining the 'incomparably' perfect Supreme Enlightenment, let all beings inhabiting the other Buddha-lands, the number of which is altogether beyond cal-

culatation, hear my Name, and let them start disciplining themselves in everything that will bear good fruit. If they desire to be born in my Country, let them be assured after death of being born therein, excepting only those who have committed the five grave offenses, the slanderers of the wise, and the destroyers of the Right Dharma."

〈私は次のように祈る。わたしが「比類無き」最上で完全な悟りを獲得し終わったとき、他の仏国土——その数は全く計算を超えている——に住むあらゆる者たちに我が「名」を聞かせ、良い結果を生じるもの全てを修行するきっかけにしよう。もしも彼らがわが国に生まれたいと願うなら、その死後にそこに生まれることを確信させたい。ただし、五つの重大な違反を犯してしまった者たち、賢者を中傷する者たち、正しい教法の破壊者たちだけは除く〉。

このように、原典と英訳では文の構造が異なっている。「我が名を聞」き、「もろもろの善本を修」すといった衆生の行いが、英訳では使役形で (let all beings..... hear my Name/let them start disciplining.....) で表されている。衆生がこれらの行いの担い手であることは変わらないが、それが阿耨多羅三藐三菩提によってもたらされるという関係にあることが強調されていると言えよう。

さらに、ここで文を一旦区切り、衆生が「我が界に生まれんと欲わん」という内容を条件節 (If they desire to be born in my Country) として、「それ捨命の後、必定して生を得しめん」 (let them be assured after death of being born therein) と結びつけている。この箇所では、「我が界に生まれんと欲わん」という内容は、使役形で表されていないことが目を引く。

いずれにせよ、以上の英訳からは、菩薩の誓願の内容として、仏となったときの衆生へのはたらきかけを、大拙師が腐心して英訳の表現に盛り込んでいることがうかがわれる。前回 (本紙第13号) 紹介した、願名の英訳では受動態が多用されていたが、今回の例では使役表現が用

いられている。いずれも、動詞表現について、誰が誰にはたらきかけているのか、という点に配慮がなされている。例えば、称名といった、表面上は一つの行為であっても、そこには、衆生にはたらきかける仏とそれに応える衆生という重層的な構造がある。そこにわれわれは、仏と衆生の関係を生き生きとしたものとして感じ取ることができるのではなかろうか。

■ 大拙師の真宗理解の立場

大拙師の英訳からは、このような、仏と衆生の呼応関係に留意された表現が、至るところに見受けられる。ただし、これまで他の箇所でも確認されたように、英訳の表現に、宗祖の読み方と異なる点があるのは否めない。これからの課題としては、読み方や表現上の相違などについて、大拙師が『教行信証』をいかに読み、英訳として表現されようとしたのか、底本なども参照して確認していくことも必要であろうが、大拙師が真宗を理解するにあたって、どのような立場に立っておられるかを確認しておくことも重要であろう。この点について、2005年2月3日の研究会にお招きした、大谷大学の安富信哉先生は「宗祖が根本視されるのは本願であるが、大拙師が英訳にあたって『教行信証』を解釈したときに、大悲ということが非常に大きな意味をもったのではないか (取意)」と指摘された。

禅仏教出身の大拙師が、特に、般若^{はんにや}思想を重視されることは言うまでもないことであるが、今回紹介した『悲華經』引文の英訳は、般若に基づきながら、如来の大悲のはたらきを、より積極的、具体的に表現しようとしたものと見ることができる。たとえ宗祖の読みと異なるとしても、大拙師の表現が大乗仏教の精神に則ったものであることは間違いない。そういった大乗仏教の精神から、もう一度『教行信証』の思想を生きたかたちで捉え直す。そこに英訳『教行信証』の魅力があるように思う。

(元親鸞仏教センター研究員)

● 清沢満之研究会報告 ③ ●

他力仏教の再構築

—「他力門哲学骸骨試稿」読解—

親鸞仏教センター研究員 伊 東 恵 深



清沢満之研究会では、2002年7月から毎月1回開催してきた『宗教哲学骸骨』（以下、『骸骨』と略記）の読解を一応終了し、引き続き2004年5月から「他力門哲学骸骨試稿」（以下、「試稿」と略記）を月1回のペースで読み進めている。また、通常の研究会に加え、2005年1月19日には「清沢満之における『他力門哲学骸骨試稿』の思想的意義」と題して、東京経済大学教授の今村仁司先生をお招きし、講義をいただいた。

今号では、「試稿」の「〔1〕宗教」から「〔11〕補訂」までの研究内容について、その一端を紹介し、第1回（通算3回）報告とする（出典は『清沢満之全集』〈岩波書店〉とし、巻数と頁数を記す）。



■ 「試稿」の位置

「試稿」は、清沢が結核による播州垂水（現在の兵庫県神戸市垂水）での転地療養中に、その病床で執筆された論稿である。表題が示すように草稿の形で残されており、清沢の生前には未発表の論考である。内容は全45項目からなるが、そのうちの約半数に日付が記されており、明治28（1895）年の2月初めから3月末にかけて書き綴られたものであることがわかる。

のちに清沢が、当時の心境について「回想す。明治27、8年の養病に、人生に関する思想を一変し略は自力の迷情を翻転し得たり……」（第8巻441頁）と述懐しているように、この頃、清沢の内面に一つの大きな転機があったことが窺える。それは、眼前に迫りくる自身の



今村仁司氏を迎えての研究会

「死」という不可避の事実を通して、他力門の教えに自己の立脚地を尋ね当てようとする営為ではなかったろうか。この点からも「試稿」は、清沢の思想形成や内面の変遷を理解する上で、重要な論考であると言える。

また、すでに先学によって明らかのように、「試稿」は、その特徴的な題名や論の構成などから、『骸骨』と内容的に密接な関係にある。事実、「試稿」の本文には、「『骸骨』を参照せよ」という指示や『骸骨』での考察を引用している箇所が散見される。このように「試稿」は、『骸骨』で構築された哲学体系を基本構想として、さらに他力門仏教の思想を理論的に解明しようと試みているのである。

■ 「宗教」の目的

清沢は「〔1〕宗教」で、宗教が必須不可欠の大切な教えであるのは、精神の本源において、「安心立命」、すなわち心の平安（Peace of Mind）を与えることをその目的とするからである、と定義する。そもそも歓楽や苦痛が生じるのは、心の内と外界の状況との適合の成否に関わる事柄であり、われわれの生活が有限な範囲にとどまる限り、「抜苦与楽」という大きな

楽は到底あり得ない。したがって、安心立命を願う者は、有限の領域を離れて無限の境遇を求め、これに対して精神を適合させなければならない、と論じている。

ここで注意すべきは、清沢の宗教観である。

『骸骨』では、宗教は信仰を必要とするが、道理に反する信仰を必要とはしない、衝突や闘争を生む信仰は、道理によって矯正されなければならないと、宗教を道理との関わりの中から位置づけていた（第1巻7頁参照）。

それに対して「試稿」では、「宗教とは何か」「それが果たすべき役割とは何か」について問い、その目的を「安心立命」「拔苦与楽」であると究明する。つまり、宗教を単に学問の対象として知的に論じるのではなく、精神的苦悩からの解放という切実な欲求から推究しているのである。

■ 根本の撞着

「有限」と「無限」は、清沢が宗教を考察する際の鍵概念であった。『骸骨』では、有限は無限の外に存在し得ないことから、両者の関係を「二項同体」という独自の表現で捉えていた（第1巻9頁参照）。しかし、この捉え方は一つの矛盾をはらんでいる。有限を基準として無限との関係を再考するならば、両者が同一体であることは不可能だからである。

有限ハ其体限別アルモノニシテ限別ノ存セサル無限ト同体タル能ハサルナリ 故ニ無限ナルモノ存ストセンカ 其体ハ有限ノ外ニ在リト為サル能ハサルナリ

（第2巻47頁）

このように「試稿」では、有限と無限の関係があらためて問い直され、そこに根本的な矛盾が見いだされてくる。これが「根本の撞着^{どうちやく}」である。しかし清沢は、どちらかの論を棄てたり、優劣をつけたりすべきではないと言う。なぜなら、これらの別によって、宗教に自力門と他力門の差異が生じるからである（この問題については、「[25] 自力他力」で詳述されているので、あらためて触れることにしたい）。

■ 知的に耐えて歩む

清沢は「[7]（有限ハ無我ナリ）」以降、先の「根本の撞着」を内に抱えつつも、有限の側から、いかにして無限に進み得るかという問題に、「因縁所生」の道理を手がかりとして応えていこうとする。紙幅の都合で詳しくは紹介できないが、一瞬一瞬変化する無常の世界のなかで、前の状態の現象（有限）が後の状態に伝わる^{すがた}ことが可能なのは、その本源に立ち返ると、有限の真の相は個々別々の有限ではなく、無限と同一体・表裏一体の関係だからであると論証していく。

親鸞仏教センターの定例研究会では、この清沢の考察の進め方について、「飛躍があるのではないか」と議論になったが、今村先生は「試稿」の魅力的な点として、絶対に飛び越すことのできない溝（根本の撞着）を十分に理解しつつ、その悪循環に飛び込んで学問の言葉で論理的に語る、つまり、情緒的ではなく、知的に耐えて歩み抜こうとする苦勞を挙げておられた。

「試稿」を一項目ずつ丁寧に読み進めていくと、それは問題提起と応答によって織りなされていることに気付かされる。『骸骨』は、小見出しともいえるべき小題のもと、簡潔に整理された要論が列挙されている。それに対して「試稿」は、思索を厳密に尽くし深めていくなから、理論の構築を行っているのである。

なぜ清沢は、他力門の教えを哲学の体系を用いて語ろうとするのか。仏教の道理を有限無限論で推究していく限り、そこには自ずと齟齬^{そご}が生じてくる。しかしその試みは、単なる知的関心からではなく、有限と無限との間に存在する根本撞着を乗り越えて、無限への通路を切り開こうとする実存的要求の表れに他ならない。ここに、求道者としての清沢を見ることができであろう。

※今村仁司氏の講義は、『現代と親鸞』第9号（2005年12月1日号）に掲載予定です。

■ 第3回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4月25日）

親鸞仏教センターでは、去る4月25日、親鸞聖人の教えによって開かれる人間関係のつながりを求め、第3回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。午後1時からセンターの仏間において「おつとめ」を行い、その後、会場を「学士会分館」（文京区・東大赤門隣）に移し、講演と交流懇談会の「つどい」をもった。「つどい」には、大学教授、医学、法曹関係者、ジャーナリスト、宗教者、作家など、これまでにご縁をいただいた各界の有識者約60名が出席し、「生活とリハビリ研究所」所長の三好春樹氏（写真上）と本多弘之所長が講演した。

東京・池袋で同研究所を主宰する三好氏（理学療法士）は、「老いと近代社会—市民がケアをダメにする—」と題する講演で、「市民社会の側からは、老いとか介護とかは見えていない。『自立した個人』を強制する近代の市民社会は、その自己中心的で狭い人間観を介護の現場にも押し付けようとするが、老いは人間にとって自然なことであり、老いた自分のままで、自分らしく生きられる生活を、いっしょに手作りしていくということが介護ではないか」と語られた。続いて本多所長は、「人間像と如来回向」と題して、親鸞聖人の主著『教行信証』『信巻』に引用された『涅槃經』のなかの、逆害を犯して悩む阿闍世王の回心を手がかりに、大乘仏教の人間像、親鸞の見た人間像に言及し、「絶望から出発した苦悩の人生に、明るみの人生が与えられるという人生観を成り立たせる原理が、如来回向という人間解放・人間救済の論理である」と述べた。

引き続いての交流懇談会では、藤野護・真宗大谷派参務の挨拶の後、田村晃祐氏（東洋大学名誉教授）から祝杯（写真下）の言葉をいただいた。また、センターの活動に対して、嵯峨淑子氏（埼玉大学名誉教授）、中澤忠正氏（TBS社長室顧問）、青山周氏（弁護士）、篠崎一朗氏（農林漁業金融公庫主任調査役）、野村文男氏（鳴門教育大学名誉教授）、山田幸子氏（帯津三敬塾クリニック看護師長）、宮下晴輝氏（大谷大学学監・文学部長）から、それぞれ激励の言葉をいただいた。

※講演録は、『現代と親鸞』第10号（2006年6月1日号・1冊1,200円）に掲載の予定です。



●新スタッフの紹介

客員研究員 **前田 専 學**

1931年愛知県生まれ。東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業、米国ペンシルヴァニア大学大学院東洋学科修了（Ph. D. 取得）。文学博士。東京大学名誉教授、東方学院長、日本学術会議会員、日本印度学仏教会前理事長、史跡足利学校座主。

嘱託研究員 **百々 海 真**

1965年東京都生まれ。明治学院大学社会学部社会学科（都市社会学）卒業。安藤建設株式会社元営業部営業課長。了善寺住職。

嘱託研究員 **春 近 敬**

1978年埼玉県生まれ。早稲田大学第二文学部（思想・宗教系）卒業。現在、大正大学大学院文学研究科博士課程（宗教学）。

主 事 **山 田 孝 文**

嘱 託 **天 野 真 知 子**

『アンジャリの会』（anjali 個人購読） 入会者募集中！

『anjali』（合掌の意味・年2回発行）の個人購読を受け付けています。ぜひ、「アンジャリの会」にご入会いただき、ご購読ください。

◆年会費 1,000円（送料込）

◆申し込みと問い合わせ

〒、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記までお申し込みください。

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係
TEL 03-3814-4900
FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 今との出会い —

あ と が き

真宗大谷派では、2011年にお迎えする宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念事業の一環として、鈴木大拙先生（1870～1966）の英訳『教行信証』再版の事業に着手することとなった。鈴木先生は95年のご生涯をとおり、深く仏教精神を体解され、仏教文化の独自性を世界人類に発信された仏者である。また、大谷大学元名誉教授、イースタンディスト協会（東方仏教徒協会）の設立者でもある。現在、入手不可能なこの英訳『教行信証』は、当時の宮谷法含宗務総長の熱烈な懇望により、1961（昭和36）年、親鸞聖人七百回御遠忌法要に合わせ、鈴木先生が89歳から2年間をかけ、翻訳されたものである。2005年7月から始まった再版事業については、東京大学名誉教授の前田専學氏を編集監修者とし、親鸞仏教センターの主幹業務と位置づけられて進めることになった▼既報のとおり、親鸞仏教センターでは、2002年7月から英訳『教行信証』研究会を立ち上げて、鈴木先生の英訳『教行信証』を読解しながら、英訳をとおり『教行信証』の現代的表現を試みている。親鸞聖人の、文字どおり苦心して願ってくださった教えである『教行信証』を漢文で了解する場合にも、また、その内容を現代人が主体的に汲み取る場合にも、鈴木先生が世界的な仏教者として、あるいは禅の体験を踏まえられて、漢文の言葉をご自身が一度かみくだかれたうえで、それを英語に表現されたということには、あらためて大きな意義があることを思う▼いまや世界の情勢を見ても無惨な争いはたえず、宗教の問題を抜きにできない時代であって、学術的意味からも、また親鸞聖人の教えに自らの生き方をたずねようと願う信仰の意味からも、一人でも多くの人々にふれていただきたいと願うものである。また、直接、手にとって親しめるような普及版の製作についても、順次取り組んでいきたい▼2005年6月1日、親鸞仏教センターのホームページがマイナーチェンジした。更新内容の主なものとは、①活字の拡大、②「アンジャリの会」入会手続きや公開講座の案内、③三誌紙（『anjali』・『現代と親鸞』・『親鸞仏教センター通信』）の新刊案内とその入手方法などである。今後も、皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしています。（長谷岡）